〔書　評〕

大崎節郎著

『神の権威と自由』

一九八二年　日本基督教団出版局

牧田吉和

本書の著者大崎節郎教授は、東北学院大学キリスト教学科にて教義学を講ずる、日本キリスト教団における有力な教義学者の一人である。

本書は、著者の一九七〇年代の諸論文に必要な補筆をし、一書として上梓されたものである。論文集という性格上、著者自身も願っているように、「厳密な意味における体系的主張を読みとらないように」（六頁）注意すべきであるが、かといって、雑多な論文の単なる寄せ集めではない。教義学者らしい一貫した神学的論理構造があり、その意味では、十分に体系的著作の名に値する書物である。教義学部門における久し振りの本格的著作である。

本書のテーマは、「聖書と信仰告白をめぐる問題」（四頁）である。このようなテーマの追求の背景には、いわゆる万博問題以来の日本キリスト教団内部の対立と論争があることを著者自身も明らかにしている（四頁）。事実、本書のあちこちに日本キリスト教団の具体的諸問題への言及が見い出される。しかし本書は、同教団の問題をジャーナリスティックに扱った書物ではない。著者は、健全な教義学者が、常にそうであったように、机上の空論をもてあそばず、現実の状況を直視し、そこから出発し、絶えずそれに固執しつつ、神学的思索を重ね、聖書に尋ね、教会の歴史に聞き、教義学的論理の厳密な構築にまで進み、そこから問題解決への根源的方向を示そうとしている。その際、著者の神学的思考を基本的に導いているものは、K・バルトの神学である（六頁）。著者は、一九六六年にゲッチンゲン大学より、「カール・バルトの予定論」の論文によって神学博士号を取得したのであるが、本書において、「聖書と信仰告白をめぐる問題」のバルトの神学の、バルトをよく理解したもののみがなしうる適切な解説をも期せずして、読者は手にすることができる筈である。

一読すれば判明するように、著者の立場は、福音主義に立つ者とは異っており、既述のごとくバルトの影響も明瞭である。しかし、これらの事実の故に、もしわれわれが、本書を門前払いするのであれば、得るべき多くのものをも同時に失うであろう。われわれは、著者の堅実な、又学的誠実さに貫かれた教義学的思索を通して、教義学的思考がいかなるものであり、どのような姿勢でなされねばならないかを学ぶことができるであろう。

本書は、二部からなっており、第一部では、「教義学の根本問題」が扱われ、ここでは、「教義学の課題」・「教義学と信仰

告白」・「教義学と聖書学」について論じられる。第二部は、「聖書と伝統」が扱われ、「聖書の正典性」・「聖書の解釈」・「信仰告白の本質」・「信仰告白の歴史」等について論じられる。様々な課題について論じられるのであるが、根本的テーマは、既述のように「聖書と信仰告白をめぐる問題」の「聖書」について

さて、「聖書と信仰告白をめぐる問題」の「聖書」についてであるが、最近、福音主義内部で聖書論をめぐる激しい論争がある。本書でも、聖書論が、正面きって取り上げられており（特に、一六三―一三九頁）、バルトの聖書論が著者の基本的立場である。バルトの聖書論が、何を意図したものであるかを、福音主義に立つ者も、本書を通して正確に知ることができる。

著者は、自らの聖書論の根本命題を、「聖書は、イエス・キリストについての第一次的証言である」（一七二頁）と言い表わしている。この命題は、二つの事柄を含んでいる。第一のことは、聖書の証言的性格に関係している。証言は、人間の言葉を前提としており、人間の言葉である以上、「歴史的文化的に制約された、誤りを犯しうるまた事実誤りを犯す人間の言葉」（一七〇頁）である。この意味で、聖書は「人間的文献」であり、『正典の自由な研究』は、当然の権利を有しているのである」（一七〇頁）。この視点から、著者は、プロテスタント正統主義の聖書論を、霊感論による聖書の神格化とみなし、聖書の人間性を犠牲にした聖書の仮現論的理解と断定して排除する（一六九頁）。しかし、聖書の証言性に関連して、注意すべきことは、それが、単なる証言にとどまらず、第一次的証言であることである。イエス・キリストにおいて起った歴史的一回的出来事である神の啓示を、預言者と使徒とが、預言者的使徒的一回性において受領し、それについて証言するという意味で、第一次的証言なのである（一七六頁）。この第一次的証言性が、聖書を聖書として他のものから区別する形式的特別性である（一七六頁）。第二のことは、聖書が、イエス・キリストについての証言であることに関係している。著者によれば、「この『イエス・キリスト』の証言である点に聖書的証言の内容的特別性が存在する」（一七三頁）。この視点から、著者は、聖書の内容的特別性を忘却した近代合理主義的自由主義的聖書理解を批判し、これをエビオン主義的聖書理解と断定し排除するのである（一七一頁）。

以上のように、著者は、「聖書は、イエス・キリストについての第一次的証言である」という命題によって、一方では、プロテスタント正統主義の神の啓示と聖書との直接的同一化による聖書の神格化、即ち仮現論的聖書理解を、他方では、聖書を単なる人間的文献に解消せしめ、神の啓示と聖書の同一性を何ら見ようとしない近代合理主義自由主義のエビオン主義的聖書理解を排除し、神の啓示と聖書の「動的、弁証法的、間接的同一性」（一七五頁）を主張するのである。その場合、間接的同一性が成立するのは、「聖書の人間的言葉において、神の言葉が聞かれるという出来事において」（一七三頁）なのであり、

それは、「神の恩恵の奇跡」（一七四頁）なのである。この事態こそ、宗教改革者が、「聖霊の内的証示」（testimonium sancti internum）として明らかにせんとした事であると言う（一七四頁）。

このように見てくる時、われわれは、著者の聖書論が、バルトと同じ軌跡を描いているのをくっきりと見ることができる。ここで、著者の聖書論全体を取り上げるとなると、バルトの聖書論そのものを論じなければならなくなり、それは、この書評の枠を越えることであろう。しかし、ここで指摘しておきたいことは、著者の聖書論にあるような聖書のキリスト証言性という事柄自体を、単純にバルト的といって斥けることは福音主義にとって健全な態度とはいえないということである。十九世紀から二十世紀初頭にかけて、自由主義神学と果敢に戦った保守派の偉大な神学者たち、A・カイパーやH・バーフィンクの聖書論の根幹には、聖書のキリスト証言性の明確な自覚が存在したことを忘れてはならない。福音主義神学は、聖書のキリスト証言性を正当に評価することによって、むしろ、自らの聖書論構築の正しい道筋を見い出し、多くの実りをも獲得するであろう。

問題なのは、聖書のキリスト証言性の概念そのものより、「証言の権威」をめぐる問題である。著者は、証言が、人間の言葉を前提とし、人間の言葉は、歴史的文化的制約性と誤謬性をもつと主張する。しかし、「歴史的文化的制約性」という証言者の限界性は、直ちに、証言しようとした事柄との関係において証言それ自身の誤謬性と結びつくものではない。証言者の歴史的文化的制約性は、必ずしも、キリストを証しする証言の信頼性を損うものではない。著者は、聖書を聖書として区別する形式的特別性として、証言の第一次性、預言的使徒的証言性を挙げている。これは、正典論の問題と密接に結びついた問題であるが、この形式的特別性は、単に第一次性という事においてだけ存在するのであろうか。イエス・キリストの死と復活の出来事の使徒的証言は、その直接的・第一次的証言という特別性のみならず、神的権威性という特別性をも保持しているのではないか。「あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたのです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです」（テサロニケ第一・2・13）とパウロは、主張したのではなかったのか（使徒的証言の権威に関連して、H・リダボスの *The Authority of the New Testament*, 1963, *Studies in Scripture and its Authority*. 1978, 聖書論々集、聖書図書刊行会、所収論文「新約聖書正典」等を参照せよ）。われわれは、キリスト証言という聖書の内容的特別性と切り離さず、否むしろ、その内容的特別性との有機的本質的関連性において、聖書的証言そのものの霊感を主張しなければならない。著者の指摘する「聖霊の内的証示」と、これによってのみ正当な仕方で神学的に位

置ずける道が開かれるはずである。この意味で、われわれは、著者に対して、第一次的証言としての使徒的証言の権威の問題を、聖書に即して再考すべき事を要求しなければならない。

本書の著者は、福音主義神学に立つ、H. C. Thiessen の *Systematic Theology* や D. G. Bloesch, *Essentials of Evangelical Theology* 等にも目を通して、批判的ではあるが言及している（一七九頁）。われわれは、著者のこのような学的態度を評価しなければならないであろう。しかし、著者が、プロテスタント正統主義の聖書論を仮現論的とみなし、この同じ連続線上で、福音主義神学者をも一括して扱うのは、正確ではない（一六九頁）。むしろ、福音主義神学は、この点について強い警戒心を有しているのである。著者のバルト等欧州の神学者への傾倒から見て、古くは既にのべたA・カイパー、H・バーフィンク、新しくはH・リダボス、G・C・ベルクーワ、K・ルニヤ等のオランダの保守派神学者により関心が払われる時、福音主義との実りある討論が可能となると思われる。

次に「聖書と信仰告白をめぐる問題」の「信仰告白」の議論に移ることにする。

著者は、まず、ローマ・カトリックの「聖書と伝統」の問題を分析・批判して（二八―三六頁）、「ローマ的『聖書と伝統』を離れて『聖書のみ』(Sola Scriptura) という宗教改革者の決断に沿って歩む道」こそ、「われわれの教会を教会として生かす唯一の道である」（三六頁）ことを明らかにする。しかし、注目すべきことは、著者は、そこで「宗教改革者たちの聖書原理（Schriftprinzip）は、伝統主義（Traditionalismus）を厳に排除するものであったが、しかし、伝統（Tradition）そのものを軽視するものではなかった」（五四頁）という点を指摘して、「信仰告白」への正しい関わりを喚起していることである。

著者は、二つの誤謬を自覚する。一つは、「信条主義」という伝統主義の誤謬である。古来、プロテスタントの伝統は、能動的規範（norma normans）としての聖書と受動的規範（norma normata）としての信仰告白を区別して、聖書の信仰告白に対する優位性を明確化してきたのである。しかし、プロテスタント正統主義は、原理的序列としてはこのことを語りつつも、事実上、信仰告白を聖書に優先させ（七九頁）、信仰告白について一種の霊感さえ説く者が現われたのである（六六頁）。これは、新しい伝統主義である。今一つは、このような正統主義の極端な伝統主義への反動として出てきた、信仰告白を問題とせずこれを解消させてしまう誤謬である。この誤謬は、啓蒙主義による合理的倫理的キリスト教と敬虔主義の二つの方向において現われたのである。この両者は、共に聖書を事実上「主観」の領域に幽閉する結果をもたらしたのである（六七頁）。

著者は、信仰告白の絶対化でもなく、それの解消でもなく、「われわれに先立つ教会の父祖たちによる聖書的証言の内実への応答であり聖書の講解である信仰告白を尊敬し、これに導かれつつ、しかし、自らの責任において、聖書的証言の内実把

握」（六〇頁）として、教義学の業を行うことを求めるのである。

われわれは、例えば、信仰告白の拘束性の問題等について著者に対する多くの問いと批判を持っている。著者は、信仰告白の霊的拘束性を強調する。当然のことである。しかし、霊的拘束性が、法的拘束性という具体性と結合しないならば、教会論的には一種の抽象論に終わらざるを得ないであろう。著者の拘束性をめぐる議論は、この抽象論の傾向を脱し切れていない。しかし、ここでわれわれは、批判に多言を労するよりも、著者の本来の意図、「聖書と信仰告白」を主題とし、両者を切り離なさず、信仰告白を正しく位置づけようとするその意図を積極的に評価すべきである。

既に述べたように、最近、福音主義神学の陣営において聖書についての論争がある。しかし、われわれは、本書を読むことによって、信仰告白を等閑視しての聖書論々争の問題性を深く自覚する筈である。信仰告白への無関心は、単に自由主義神学においてのみならず、福音主義神学にも共通に見られる現象である。「聖書のみ」のプロテスタントの原理は、伝統の無視とは異ることを知らなければならない。むしろ、信仰告白という教会的伝統への関心こそが、聖書論への健全なアプローチを養うのである。それ故に、福音主義神学に立つわれわれも、信仰告白への関心を深め、その学習を粘り強くなさなければならない。この点で、本書は、大変有益な書物である。本書において、信仰告白に関する基本的事柄がよく整理されて提示されている。又、特に「信仰告白の歴史」（三〇七―三三七頁）は、信条史の入門的役割を果し、注に付されている文献は、信条史研究の文献案内としての意味をもっている。

本書は、われわれとその神学的立場を異にする書ではあるが、腰をすえて読むに値する内容豊かな一書である。

（改革派名古屋教会牧師）

上智大学中世思想研究所編訳／監修

『キリスト教史』（全十一巻）

一九八〇―一九八二年　講談社

横山　武

キリスト教の二千年におよぶ流れをまとめることは、たしかに、大変な仕事である。当然のことながら、長い歴史における無数の出来事の中から、取り上げるべき事実の選択とその解釈について、著者あるいは企画者の意図や目的が、ひとつの物差しとなるのは、避けられないことであろう。

本叢書は、一九六三年から七八年までの間に、ヨーロッパ四ケ国語（イギリス・ドイツ・フランス・オランダ）で同時出版された、「教会史」（五巻）のほん訳である。邦訳名では「キリスト教史」となっているが、それは、「従来の部門史としての『教会史』との混同を避け、広く各時代の一般的〈感性〉＝センシビリティーをも包含する精神状態の潮流を描写することを目的とし、〈神の民〉とのかかわりをもつ諸時代の多彩な文化現象の記述を盛りこむという、原著の著作意図を一層明確に表現するために採択されたもの」（1巻〈邦訳への序〉2頁）とのことである。

キリスト教の具体的展開過程を、世界史的展望において捕えようとの意図は、本書においては、特定の枠組と独自の観点とからなされている。つまり、本叢書の分担筆者十数人のほとんどがローマ・カトリックの歴史学者であるところからくるそれである。それゆえに、ローマ・カトリックの史観にしたがったキリスト教の歴史を見ようとする場合には、とくに良い手掛かりを提供してくれるものとなるであろう。

さて、つぎに内容であるが、邦訳で十一巻に分けられているものを、順を追って見て行くことにする。

第一巻　「初代教会」

ここでは、ペンテコステに始まった教会が、エルサレムから、ユダヤ、サマリヤと進展し、ついに、ローマ帝国の巨大な勢力にチャレンジするにいたるまでに成長する、三世紀までの時期が取り扱われている。

その過程では、ユダヤ教の種々の要素からの脱皮が必要であったし、また、当時の世界思想であったグノーシス主義を基調とした、いろいろな教説の惑わしを退けることも必要であった。さらには、ヘレニズムの文化的挑戦を正しく克服する課題もあった。ユダヤの片すみで始められた、普通の人々の小さな一団が、世界史の表面に現われて、ローマ帝国の無視できないライバルとなるまでのステップの一つ一つが、興味深く開陳されている。

第二巻　「教父時代」

ローマ帝国の迫害と、それに勝利を得た四世紀の教会は、さらに乗り越えるべき、いくつかの課題に直面していた。

古普遍教会の指導者たちは、それらを克服する戦いを通して、さらに教会を進展させたのであるが、まず、古普遍教会の内的課題が述べられる。それは、教会が最初に直面した神学的課題でもあるキリスト論の問題であった。ここでは、キリスト論の二要素である、アリウス論々争と両性論々争が、詳細な記述はとにかくとして、要領よくまとめられている。

この時期に活発な活動をはじめ、ローマ帝国の滅亡へ拍車をかけたゲルマン民族の侵入もまた、すでに帝国内で国教化していた教会にとっては、重大な外的問題であったはずである。ただし教会は、帝国の政治的消滅にまき込まれることなく、その本来の生命力による侵入者への伝道と教育によって、新しい時代の指導者としての地位を確立して行くのであるが、この世界史的なできごとについての記述は、分散的に見られるのみで少ない。

第三巻　「中世キリスト教の成立」

第四巻　「中世キリスト教の発展」

この二巻は、全体を通して四部に分けられており、第三巻では一部と二部、第四巻では三部と四部が取り扱われている。

中世前半について述べる第三巻では、西ヨーロッパ社会における教皇権の強化、ビザンチン教会とその神学論争、東西教会の関係と分裂の問題などが述べられる。さらに、中世における特徴的な歴史的事実である修道院の発展や改革についても、第四巻まで続く数章にわたって記述されている。ただ、もう一つの中世的特徴の濃いできごとであり、とくに一般史との関わりが深い十字軍について、わずか十頁たらずの言及である。

中世の後半は、おもに第四巻で扱われるが、最盛期ともいうべき一一、一二世紀における神学、思想、文学などが部門別に述べられ、さらに芸術と音楽なども取り上げられる。教皇と皇帝の関係は、この時代の緊張した課題であるが、アヴィニョン時代、教会分裂時代など中世の末期的できごとも、この巻で取り上げられる。

第五巻　「信仰分裂の時代」

一六世紀の宗教改革期が、この巻の内容である。この時期の出来事を〈信仰の分裂〉と見るか、あるいは〈改革〉と考えるかは、すでにひとつの評価を含んだ表現であるわけだが、第三章〈ルターの個人的活動、またヨーロッパの運命としての宗教改革〉で、いわゆるプロテスタントの宗教改革が扱われる。しかし、ルター、ツヴィングリ、イギリス、カルヴァン、それにアナバプテストまでをふくめて、一つの章で一〇〇頁ほどの中に収めようとするのは、いささか無理の感を否めない。一方、カウンター・リフォメーションとしてのトリエント会議に関しては、二章一七〇頁あまりが費やされている。本叢書の視点や特徴がとくに鮮明にされている点であるといえよう。

また、オスマン・トルコの支配下に置かれたギリシヤ正教の状態、イスラム世界と西方教会との関係などが記されている。

なおこの巻以後のいくつかの巻に、発端から現代に至るまでの、日本におけるローマ・カトリック教会の流れが、合計して百数十頁ほど加えられている。

第六巻　「バロック時代のキリスト教」

一七世紀のキリスト教を取りあつかうこの巻では、当然のことながら、絶対主義国家の確立を目指す世俗的な政治勢力と教皇権の間の確執が問題となる。また、ローマ・カトリック教会による海外布教について、東ヨーロッパにおけるギリシャ正教会の状態も取り扱われている。

第七巻　「啓蒙と革命の時代」

一八世紀の啓蒙時代において、さらに弱体化する教皇権、ローマと各国のローマ・カトリック教会の関係、そしてヨーロッパのプロテスタント地域におけるローマ・カトリック教会などが取り扱われる。

第八巻　「ロマン主義時代のキリスト教」

一九世紀前半のヨーロッパにおけるローマ・カトリック教会の状態を述べている。近東地方にたいする布教活動についても論ずる。

第九巻　「自由主義とキリスト教」

一九世紀後半と二〇世紀初頭のヨーロッパにおけるローマ・カトリック教会の歩みである。とくに第一ヴァティカン公会議の開催はこの時期において重要な位置を占めている。ヨーロッパ大陸における各国のローマ・カトリック教会、ローマ・カトリックにおける近代主義による危機についても言及する。

第十巻　「現代世界とキリスト教の発展」

一九世紀後半から現代までの、イギリス、オーストラリア、カナダ、北アメリカ、ラテンアメリカ、アジア、アフリカ等におけるローマ・カトリック教会について述べる。また一九世紀における布教についても言及している。

第十一巻　「現代に生きる教会」

第二ヴァティカン公会議に至るまでの半世紀と、その会議についての種々の面からの考察がなされている。また、二つの世界大戦下におけるローマ・カトリック教会についての言及も見られる。

以上の内容の中で特に、「バロック時代のキリスト教」（第六巻）以後は、より正確にはむしろ〈ローマ・カトリック教会史〉と言うのがふさわしいと思われる。さもないと、一般の読者はプロテスタント教会の流れの欠けている歴史を、キリスト教史と誤解するかもしれない。

なお、ほん訳においても、「平易明快な表現」に留意して、「明快暢達な日本文によって、原書の著作意図を広くわが国の読者に伝えたい」との努力がなされているようだが、各巻によって読み易さの違いも感じられる。たとえば、「……（修道院制は）……福音の本質的な面の一つをつくっているあの素朴な人びとへの高い位置づけを再び確立しようとしたのである」（2巻97頁）と言うような、一般的にはあまりなじめないと思われる表現も、気になるところである。

最後に、本文の頁に挿入されている図版や、各巻末の文献目録などの付録の豊富なことも特徴であると言えよう。ちなみに、図版は、全巻で五三〇ほどにのぼり、巻末付録のうち、全巻合計で、人・地名索引は約二五〇頁、事項索引は約一二〇頁、年表は一〇〇頁余、用語解説は約九〇頁、文献目録は五三〇頁に及んでいる。その他の表やリストをも含めて、この巻末付録はまことに便利であり、有益である。

この叢書の基調となっている立場や視点についての賛否の批評はとにかくとして、取り上げられている分野については、新しい研究成果を良く考慮して扱っていることや、十一巻にも及ぶ膨大な著述が、単なるダイジェスト的解説の域をこえていることなど、教会史の研究にひとつの資料を提供するものとして評価することができよう。

（東京中央バプテスト教会牧師、聖契神学校講師）

『キリスト教教育の探求』

A・E・サナー、A・F・ハーパー編
千代崎秀雄、芳賀正、竿代照夫共訳
一九八二年　福音文書刊行会

稲尾三活

本書は、いわゆる、「探求シリーズ」もの、旧約聖書、新約聖書、キリスト教信仰、伝道の歴史的探求の最新版であり、米国ナザレン系の出版社よりの訳本である。福音文書刊行会（EPA）よりの出版本は、すべて、「ウェスレアン・アルミニズム」神学に立つもので、「ウェスレー神学の中心問題」、「荒野の泉」、「戦う使徒ウェスレー」などを初めとする聖潔に関する実践神学的な本が多い。カルビン神学との比較研究に価するものの中で、キリスト教教育という観点から、実践神学の部門では、幅広く適用出来る貴重な一冊であると、評者は、確信し、東京聖書学院、日本キリスト教短大、その他で、テキストとして用いている。

(1)「内容分析」

第一部　キリスト教教育の基盤

第一部は、6章より成っており、夫々、専門の経験豊かな牧師、キリスト教教育家が担当している。その要約を分析する

と、福音主義神学の立場から、次のようになろう。

① その範囲

「キリスト教教育は、人々が福音に応答し、ますますその福音の約束を理解し、その要求を受け入れて行くように教会が、その人々を援助しようとする一つの手段なのである。そしてそれは、生涯にわたる過程である」（P10）つまり、一言で言えば、「キリストの像成るまで（ガラテヤ4・19）の、教会における、全人格、全生涯、全地域にわたるキリスト宣教教育」である。本書の編者は、ここで代表的福音派の定義と著名な学者たちの見解及び著書をあげているが、とても公平である。

ここで、ジョン・ウェスレーの定義と範囲について、「㈠、すべての学習者が、回心と聖化において、福音の力を受けられるよう準備を整える。㈡、キリスト教の恵みのうちに、またイエスのうちにある真理を知ることにおいて、人格的成長を体験するよう学習者を励まし、導くこと。㈢、彼らがキリストの体の中で、また教会の外の世界で、みのり多い奉仕をする準備をし、かつその場所を見つけるにあたり、援助していくこと」（P19）であると要約している。マタイ5・48、ガラテヤ2・19―20、ヘブル12・14、第一テサロニケ5・23―24などの児童、信徒の経験を土台とした、キリスト宣教教育こそ、重要なのである。

② その聖書的基盤

本書は、ここでヘブル的教育の重要性を強調するが、評者も全く同感である。現今の日本の青少年の非行は、家庭に聖書がなく、申命記5章、第二テモテ3章の教育指針が、全く無い所にあると、評者は断言したい。

③ その歴史的発展

初代教会時代から、中世、近代、現代にわたり、特に、ルター、イエズス会、コメニウス、カルビン、ウェスレーの教育原理や制度について、読者は、多く教えられるだろう。日本の教会学校運動、神学校、小中学、高校、大学の源泉をもう一度検討したいものだ。

④ その神学的根拠

本書の中で最もユニークな場所であり、神学とキリスト教教育の関係ずけが、よくまとめられている。教師と児童の聖別の必要を、神学校、ミッション・スクールで、評者は痛感している。ホーリネス神学の実践が大切だ。

⑤ その心理学的根拠

本書には、あらゆる心理学的アプローチが、述べられてはいるが、一応それらを学ぶ必要は充分ある。しかし、評者としては、もっと聖霊の教導、祈り、礼拝、聖言の学びなどに強調点を置いてもらいたいと思う。あくまでも「福音的発達心理学」という、福音を土台としたものでありたい。もっと、臨床、牧会心理学の探求と実践が、今日必要ではなかろうか。

⑥ その社会的基礎

あまりにも複雑化している現代社会を、社会学の立場から、よく分析してある。しかし、あくまでも本書は、米国人の発

想、社会理念から書かれているため、日本の社会の現実に適用させるには、祈りと工夫が必要となる。キリストの力で、レギオンの悪霊たち、非行、暴力、淫行、自殺の霊をどう追放するか（マルコ5章）、祈りと断食による信徒、牧師の聖別、世の光、地の塩としての存在の意義を強調したい。聖霊の内住による戦うキリスト者（エペソ5の18）こそ、キリスト宣教教育の原動力である。日本社会の浄化力である。

第二部　キリスト教教育のカリキュラム

⑦ カリキュラム展開の原理

「それは、指導的かつ実践的なキリスト教教育のプログラムである」（P261）とあるように、どんな教案を教会学校で使用するかによって、その教会の結実も変って来るのである。教会堂の設備、広さ、内容も充実したいものだ。

⑧ キリスト教教育の方法

よく、方法論いわゆるHOW TO的思考を、批判する人がいるが、これも又大切である。本書には、応答法、討論法、妙案法、グループ法、帰納法、深みの聖書研究法、シンポジューム法、視聴覚法などにつき、詳しく説明されている。読者の兄弟姉妹方、特に教会学校教師、神学生、修養生は、これらを分級などで実行して見るとよろしい。変化性をつけて、勉強し、工夫すると、聖霊様が、非常にすばらしい形で働いて下さるのである。人間側の準備と聖霊教育こそ、教会成長の秘訣であると、評者は確信するものである。

⑨ 幼稚科のキリスト教教育

ここでは、神、キリスト、聖書、教会について、幼稚科の教授法が記されている。評者は、現今の中高生の暴言、暴力、非行問題は、この時期の家庭教育としつけにあると、聖書例、実際例から引用可能である。毎日の両親の無信仰的生活、別離、断絶、離婚、争いなどは、子供たちに恐るべき不信と暴力の霊を生み出している。エリの家庭のような放任性、日本の家庭の過保護性も研究討議して見よう。

⑩ 小学科のキリスト教教育

本書は、小下級、中級、上級と3クラスに分けているが、日本の教会学校でも適用可能であろう。しかし、日本には、米国にない問題が、山積している。例えば、聖日を平気で無視する風潮がある。父兄参観、運動会、部活、学校行事、クラブ……など、どうすべきか。今、澤牧師御一家が「日曜日訴訟」で、戦っておられるが、評者もやはり、神第一（マタイ6・33）主義に立って、はっきり信仰告白をして、主日を聖としなければならないと信じ、世と戦っている者である。この種の訴訟は、中平弁護士によれば、世界最初のものである由。神社参拝、盆、正月、偶像、家族の無関心、悪いマスコミの誘惑と戦って行けるキリストの証人としての児童の育成を目標としたい（使徒1・8）。これが主の御旨だ。

⑪ 青少年のキリスト教教育

いわゆる中高生問題を取り扱っている分野であるが、「私は

何者か」、「何が真理か」、「私は何になるか」、「誰と結婚するか」、「私の人生観は何か」という5大問題の方向づけの年齢である。その発達特性をよく学び、入念に家庭、学校、教会が、協力態勢を以て、伝道牧会にあたらねばならない。評者としては、幼稚科から青年科までをしっかり継続して、教育、訓練して行くことを心掛けている。

⑫ 成人のキリスト教教育

日本では、キリスト教教育は、高校科位までという先入観が、まだあるが、聖書的には「ゆりかごから天国まで」であるから、青年科、婦人科、壮年科（部）を形成して、その充実を計らねばならない。この面では、米国教会に学ぶ点が多い。会堂、土地の狭さや不便さはあるが、キリストの体として日本の場合でも、成長している教会が増加している。リバイバルが、静かに日本にも起りつつある。ハレルヤ。

第三部　キリスト教教育の運営機構

ここでは、次のように章名にとどめておく。

⑬ キリスト教教育の組織
⑭ キリスト教教育機関
⑮ 管理行政の諸原則
⑯ リーダー・シップと指導者の徴募
⑰ 専任のキリスト教教育
⑱ キリスト教教育における広範囲な働き
⑲ キリスト教高等教育

特に、18章の応用例は、実にすばらしい。

(2) 「総合的評価と感想」

以上、本書全体にわたり、内容を分析し、日本の事情に合わせて、評価したが、本書はあらゆる面から、キリスト教教育学を、理論と実際面からまとめたものとして、高く評価したい。全体の校正もさせていただいた者として、本書の訳文もすばらしく充実していると思う。本書は、ウェスレアン・アルメニヤン神学と方法論に基礎を置きながらも、社会学、心理学、哲学、実践論の面で大変役立つ。

しかし米国人による米国社会を背景とするキリスト教教育学であるため、どうしても日本的土壌に合わない面がある。そこで、「ぼくたちの救い」（ロバ通信社一九八二）とか、「成長する教会学校教師」（C・L・C一九八一）などもお読み下さり、日本の中高生の背景、問題点、対策、教会学校のあり方などを補っていただければ幸いである。日本では、クリスチャン人口が100人に1人位であるし、教会も少なく、これからキリスト教教育の開拓をして行かねばならない段階である。評者もライフ・ワークとして、キリスト宣教教育者の使命を以て、教会学校、教会発達成長の面で、今後とも働かせていただく決意である。

（日本ホーリネス教団入間キリスト教会牧師、東京聖書学院、日本キリスト教短大、キリスト宣教教育学院講師）

Dr. David J. Hesselgrave
Planting Churches Cross-Culturally.
A Guide for Home and Foreign Missions
1980, Baker Book House, Grand Rapids.

モーリス・ジェコブセン

本書の著者は、アメリカの福音自由教会所属の元日本宣教師で、現在は、イリノイ州ディアフィールドにあるトリニティ神学校の宣教学教授、世界宣教学部長である。

四六二頁に及ぶ本書は宣教学に関する著作で、次の五つの分野のことを扱っている。(1)クリスチャンとキリスト教宣教、(2)クリスチャン指導者とキリスト教宣教、(3)送り出す教会とキリスト教宣教、(4)生み出される教会とキリスト教宣教、(5)送り出す教会とキリスト教宣教（再考）。

第一部のはじめの部分で、著者は、教会に対する神のご計画、大宣教命令、パウロの伝道活動などを取り上げながら、キリスト教宣教の中心点を定義づけている。彼は、例えば、必ずしも弟子を作り、教会を建てるとは限らない学校や病院を建設すること、公衆衛生や免疫を作るための啓蒙運動、又は新しい農業技術の導入を含める宣教理念は広すぎるのではないかと考えている。他方、人々をキリストに導くために計画されるが、信じた人々を必ずしも教会の生き生きした交わりに結びつけるとは限らないような、クルセード又は個人伝道を中心とする宣教理念は狭すぎると考えている。

方法と宣教に関する第二章では、著者は使徒の働きに見出される、パウロの戦術と方法論を取扱っている。ここで「パウロの伝道サイクル（Pauline Cycle）」、即ちパウロの伝道計画における論理的側面が取扱われており、それは本書の核心部分である。その要点は次の通りである。(1)宣教師の任命、(2)聴衆との接触、(3)福音の伝達、(4)聞き手の回心、(5)信者達の召集、(6)信仰の確立、(7)指導者の任職、(8)信者達の委託、(9)横の関係の継続、(10)送り出した教会での報告会。そしてこれらが第三部以降の章の区分を形成している。

第三章は宣教のための教育に関することが論じられているが、この中で著者は、現代の神学教育は新しい教会を開拓形成するための訓練を殆んどしていないのではないかとみる。即ち、通常、学生達は既に形成された教会を牧会するよう訓練されていると指摘している。

第三章から始まる第二部の「クリスチャン指導者とキリスト教宣教」においては、著者は宣教地での全く指導性のない、統合されていない活動を嘆いている。そこでは、宣教師団体は平等主義を特徴とし、順番にリーダーを立てる傾向がある。目標の地域の選定に関する第五章では、著者は伝道地の選定における優先順位と都市の社会学的重要性を論じている。資源の活用に関する第六章では、聖書的なパターン、レイマンの役割、教

会建設のためのチーム活動、株分け教会方式と開拓教会方式との違いを論じている。第七章では更に教会成長の量的・質的の両面を論じ、三つの不可避の任務について述べている。(1)測定可能な目標の設定、(2)正確な記録の保管、(3)過去の経過の分析。

第三部を構成している第八章では、パウロの伝道サイクルの第一段階である、教会建設をする宣教師の選任と派遣が論じられている。首尾一貫したやり方で、著者は個々の主題を聖書的な原則、聖書中の事例、関連した研究、実際的な考察という観点から見ている。

第四部の「生み出される教会とキリスト教宣教」では、著者はパウロの伝道サイクルにおける第二段階から第九段階までを扱っている。第二段階の「聴衆との接触」に関する第九章では、社会的構造と福音への反応、伝道開始前の挨拶まわり、伝道のための選択的な接触（種族制度に関連して）、一般的な説教と教育というテーマを扱っている。そして著者はこの章を、他の多くの章と同様に、見本となる資料を含んだマスター・プランを示唆して閉じている。

第十章は「福音の伝達」に関するものであるが、著者は彼自身の専門領域からの考察、即ちコミュニケーションの分野からの洞察を提供している。また、今日の関心事である福音のコンテクスチュアライゼーションという主題をも論じている。本書の他の箇所と同様に、著者は世界のさまざまの宣教地から、ウィンターの分類ME1（文化的障害を伴わない福音宣教）、ME2（多少の文化的障害を伴う福音宣教）、ME3（外国語を学び、外国へ出て行く福音宣教）を用いて例証している。

第十一章では回心に関して、著者はやや詳しくその意味と重要性を論じ、自由主義神学は回心に内在する本質的な変化を必要としない救いを媒介したと指摘している。他方、福音主義者達は悔改めと回心を含まない、キリストへの性急な決断を警戒する必要がある。著者は更に、回心への動機づけと決断という観点から、また同様に信仰告白とバプテスマという観点から回心について考察する。

第十二章は「信者達の召集」に関するもので、著者はドイツ人社会学者フェルディナンド・トニーズの利益社会（ゲゼルシャフト）および共同社会（ゲマインシャフト）の概念、社会学者エミール・デュルケームによって論じられた無統制社会（アノミー）の概念に注目している。また、日本における創価学会の成長は小グループにおける話合いを彼らが重視した結果である、と指摘している。集会の場所に関しては、初代クリスチャン達が神殿と個人の家庭に集まったことも示唆している。

著者は第十三章を「信仰の確立」という主題に当てており、旧約時代に始められて新約時代に受継がれた実践の跡をたどっている。彼は信仰と礼拝、信仰とあかし、信仰と奉仕という主題を、聖書的な原則、聖書中の事例、関連した研究、実際的な考察という、それぞれの観点から見ている。

「指導者の任職」に関する第十四章では、著者は、目に見える組織体を設立しようと早まった努力をするよりもむしろ、霊的な指導性を高めることを優先する必要があることを強調している。また、組織化しすぎることの危険性と同じくらいに、新しい教会がそれ自身の規約の作成に深入りしすぎることの危険性も指摘している。更に、地方教会において適当な指導性を発展させること、永続的な組織体を生み出すこと、聖書に基いた戒規を保持することについても述べている。

「信者達の委託」に関する第十五章では、著者は、教会建設を目的とした福音宣教における開拓者達の引退と移動という主題と取組んでいる。また、新しく形成された地方教会の指導者達や会員達が宣教師達の移動に不意をくらって驚くことがないために、地方教会レベルでなされるべき心の準備を記している。同様に、宣教師達の側も、その団体の働きが広がり続けることができるように、他のどこかへ移動する心の準備をしていることが必要であることも指摘している。

第四部の最後の章では、著者は、設立された教会が養い育てなくてはならない継続的な横の関係を論じている。即ち、移動していなくなる働き人達との関係、同じ団体又は教派の中の他の諸教会との関係、移動していなくなる開拓者的な宣教師の団体との関係である。創立者対教会の連続的な関係が説明されている。それは次のような関係を経て推移していく。(1)独裁的―「頼まれていない監督権」、(2)勧告的―「求められれば相談に応じる」、(3)親しい交わり―「相互的援助と励まし合い」、(4)接触―「時々のコミュニケーション」、(5)断続的―「全くの断絶、接触しない関係」。重要なのは、教会設立者と教会との間に、連続的関係におけるどの段階が到達され、彼らの相互関係が近い将来にはどんな形をとるかということについて、理解がなされていることである。

第五部を構成する最終の章は、宣教師達の本国における送り出す教会を扱い、いかにして神が宣教師を通して成就なさったことを十分に理解するか、そしてすべてのクリスチャンを地方教会の宣教師の努力に参加させるかということを扱っている。

結論と評価

異文化地域における教会建設に関するこの著作は、よく準備され、よく研究されている。本書の終りには、関連する研究のかなり多数の文献目録が附加されている。学際的研究の最良の伝統に従って、著者は組織的に「パウロの伝道サイクル」の発展の各段階において、関連する研究の洞察を提供しようと努めた。そして、できる限り現在の宣教地での活動からの事例研究を用いて、彼の主題を発展させ、例証しようと努めた。それゆえ本書は、聖書に基き、学問的な方法で展開されているばかりでなく、実践的かつ実存的志向性をも合わせもっており、著者がその専門の研究に従事しながら、いかに現代の宣教活動の鼓動を感知していたかということをも示している。本書はすべての真剣な宣教学の学徒の書斎に収められてよいものである。

（東京基督教短期大学教授）

〔読書紹介〕

旧約学

富井悠夫

J. Weingreen
Introduction to the Critical Study of the Text of the Hebrew Bible.
Clarendon Press, 1982. pp. 103

ヘブル語文法書等でなじみの深い著者は、一九七八年までアイルランドのダブリン大学で教授、現在は、名誉教授。本書は主としてヘブル語聖書を学んでいる学生向きとして記されたもので、ヘブル語聖書中の筆記者による誤りを指摘し、それを正すということを目的とした手引書である。

内容は七章から成っている。

第一章　本文批評とは何か。
第二章　本文批評の源流はラビ文書に。
第三章　本文批評の範囲、限界。
第四章　一般的な誤り。
第五章　特殊な誤り。
第六章　編集者の註釈。
第七章　言語学的考察。

具体的な例が多く引用されているので、日本語訳の聖書でそれらの箇所を確かめてみると、口語訳、新改訳の間に違いがあって興味深い。特に第六章の編集者による書き込みや註釈の部分が、本文の中へ入り込んでしまった、という理解と、その例の扱いについては、大胆すぎて、受け入れがたい。この事に関しては、一九六三年に出版された「約束と成就」（F・F・ブルース編集、T. T. Clark）中の「旧約聖書とラビ文書における説明部分」（Exposition in the Old Testament and in Rabbinic Literature）で詳述されていたが、旧約聖書中とラビ文書中の両方に、共通の解釈原理があって、聖書の場合は、脚註や註釈が編集者によってテキストの中に組み込まれ、固定され、ラビ文書の場合は、固定されたテキストから、引き出され拡大された、という点の相違だけだという。第七章では特に「ヤーダ」（知る）という単語の意味をアラブ語の「低くされる」という意味と関連づけて説明する例をサムソンとデリラの物語りで扱っている。本文批評の書物として、榊原氏の著書、鍋谷氏の訳書等があるが、本書は著者の独特な扱い方も含めて、聖書本文に対する興味を一段と深めてくれるものである。

Gary G. Porton
Defining Midrash
KTAV Publishing house, 1981

この論文は、「古代ユダヤ教研究」と題する二冊の書の第一巻に収められているもので、アメリカのブラウン大学で教授をしているユダヤ人学者による旧約聖書の解釈に関する考察である。著者は、ミドラシとは何か、何故研究するのか、どのように研究すべきか、なぜその方法がよいかという面から、聖書解釈を意味するミドラシについて扱う。論文の内容は、ミドラシ研究の歴史の浅いこと、ミドラシの意味と、聖書中の用例、ミドラシを定義することのむずかしさ、を述べ、ミドラシ考察の第一条件として権威づけられたテキスト（聖書）に直接結びついている事をあげる。従って、いわゆるラビ文書イコールミドラシではない、と断言する。ここに、一つの新しい主張が見られる。聖書と結びつかない様々な規定、ミシュナー、タルムード等を、即ちミドラシとする事は正しくない、と考える。そして、ラビ文書は、ミドラシと非ミドラシの二面をもっていると云う。

ここから逆に、捕囚帰還後のパレスチナユダヤ人にとって、トーラーは、実生活に、不可欠な唯一の権威源ではなく、祭司制、神殿という権威源が、具体的生活により大きな位置を占めていたのではないか、という点と、神殿破壊以後のパリサイ派の支配力の大きさを再考察しなければならないのではないか、という点が、浮び上る。即ち、新約聖書の舞台と時代を理解する上で時間的に後代のパリサイ派的な資料だけに頼ったり、それらの資料を直接的に新約聖書解釈にあてはめようとするのは、早計ではないか、という事である。ミシュナーにあらわされるパリサイ派の聖書解釈や礼拝規定の殆んどが、直接聖書から引き出されていないという事も、注意を要すると云う。本論文は、ユダヤ教内の批判的研究を示すものとして興味深いが、前掲のワイングリーンの論文とも関わりをもつ、聖書中のミドラシとラビ文書中のミドラシの関係にもふれているので併記した。

Peter C. Craigie
Ugarit and The Old Testament.
W. B. Eerdmans Publishing Company. 1983. pp. 110

著者はカナダのカルガリー大学教授、N・I・Cの申命記註解等の著書がある。序文に、「今日では旧約聖書に関する詳しい書物や註解書には必ずといってよいほどに、ウガリットへの言及がある」と記して、本書は、ウガリットの町、その言葉と文献、旧約聖書研究との関わりを扱い、ウガリットへの手引きをしようという意図で記されている。内容は

第一章　聖書世界への新しい光
第二章　失なわれた町の再発見
第三章　古代ウガリットの生活
第四章　ウガリット文字と文献
第五章　旧約聖書とウガリット研究
第六章　新しい発見と展望（エブラとラス・イブン・ハニ）

第七章　研究と知識のための参考資料

となっている。今から五〇年も前のウガリットの発掘の有様から始まって、その町の様子、生活様式、紀元前一四〇〇年頃の政治、国際状況、北にヒッタイト、南にエジプトの国家関係そして、ついに紀元前一三世紀海の民による侵略による破壊等、興味深い筆致で記されていて、一気に読ませる。

ウガリット語とヘブル語の関係（共に北西セム語）や、ケレト王の伝説、アカトの伝説、バアル神々話が紹介された後、旧約聖書との関わりが扱われる。詩篇二九篇とカナンの賛美歌（表現方法が聖書記者に取り入れられている）、アモスと牧羊者（ノーケードの解釈を、王宮付きの有力者という用例から、アモスは土地所有者でかなりの有力者と見る）、申14・21とウガリットとの関係（子やぎをその母の乳で煮てはならない、という規定は直接ウガリットからは分らない）、詩篇一〇四篇とフェニキアとの関わり（ソロモンの神殿奉献の時の歌?）、詩篇の音楽的背景、契約思想、士師5・17の「船」（オニョートの意味を、気安に、のんきに、の意に理解）、ウガリットとイスラエル・ギリシャの関係（ギリシャ神話と聖書文書の両方のあるものがウガリットから派生）、そしてバアルと出エジプト記の関係（混とん・秩序・即位・神殿建立のパターン）等が、例として紹介されている。

エブラ、その他の最近の発掘作業にも言及し、特に第七章には親切な註と、説明と多くの文献が記されているので、役立つと思う。

（日本基督改革派教会堺みくに教会牧師）

宗教社会学

金本　悟

宗教社会学の文献を紹介するにあたり、宗教の定義をあつかった三冊の本を紹介させていただきます。しかし、本題に入る前に、神学と宗教社会学との関係を整理しておきたいと思います。この整理を助ける為に二冊の本をまず紹介させて下さい。

ピーター・バーガー（Peter Berger）の「聖なる天蓋」（*The Sacred Canopy*）① と、ゴードン・カウフマン（Gordon Kaufman）の「神、その問題性」（*God, the Problem*）② の二冊です。

バーガーは、ボストン大学の大学教授及び同大学神学部宗教社会学教授をされている方で、もちろん、宗教社会学者としての発言をしているわけですが、宗教社会学的な立場からは、神が実在者であるとしても、それが人間的産物としてしかあつかえないという原則を主張します。しかし、同時に、こういう主張をすることが、神が実在しないということの証明には決してならないことも主張しています。バーガーは、神学を志す人々に対し、創造者なる神を土台としても、人間の神を求め、神を考えつこうとしてやまない性格そのものを考察することが神を知る一つの道でないかと提言しています。③

カウフマンは、ハーバード大学神学部神学教授であり、神学者としての発言をしているわけですが、私達が知っている神は、神という実在全体のごく一部でしかありえず、この意味で、〝私達が知っている神〟は、確かに人の考えついたものにすぎないと認めます。その上で、神学とは、人の言動、生活の中で、神なる実在者が人という存在とどのようなかかわりを持っているのかをさがし求める学問であり、一方宗教学とは、すべての人の中から神なる存在を信じている人に注目し、この人々が、神を信じるが故に、どのような言動や生活をするかをさがし求める学問であると言っております。④

ですから、神学と宗教社会学とは本質的に相補的なものと言えます。神学を志す者にとっては、神の実在は土台であり、それを基礎として、人間の世界を含むすべての被造物の世界で、神様がどのような働きをしているのか知ろうとしております。そのような時、宗教社会学を学ぶと、信仰を持った人間は一般的にどのような行動を取りやすいかを知ることができますし、又、どのような信仰を持った時、どのような行動を取ることが多いかも知ることができます。このような学びは、神様の被造物を良く知り、神様の栄光をより良く現わしていく手助けとなると信じているわけです。

一方、宗教社会学を志す者にとっては、現在の社会科学全体に受け入れられている方法論を出発点とし、宗教的な人間の生活・言動というものを調べることにより、人の信仰と言動との

関係を考察し、人間性そのものに迫ろうとするわけです。そのような時、神学を学ぶということは、一つの宗教の中で、何が一番大切なものとされており、その大切なものを保持するのに、どのような知的体系、儀式的体系、又生活のパターンが形成されているかをより良く知ることができます。このような学びは、人間の本質を知るのに良き助けとなることでしょう。

さて、神学と宗教社会学の関係が整理されましたので、本題の、宗教とは何かという定義の問題をあつかっている三冊の本を紹介します。クリフォード・ガーツ（Clifford Geertz）の「文化の解釈」（*The Interpretation of Cultures*）⑤、ロバート・ベラー（Robert Bellah）の「信仰のかなたに」（*Beyond Belief*）⑥、そしてハンス・モル（Hans Mol）の「自意識と聖なるもの」（*Identity and the Sacred*）⑦の三冊です。

クリフォード・ガーツは一九二六年生れで、ハーバード大学卒業です。ガーツはシカゴ大学で十余年教鞭を取った後、プリンストンにある高等研究所で、社会科学の教授となっている方ですが、彼は、インドネシアのバリ島で一年、モロッコ島で二年半に渡って生活された文化人類学者です。

ガーツの「文化の解釈」は、一九六二年から七二年に渡って発表された十五の論文からなる論文集です。今は、その中から一つを選んで紹介しましょう。それは、一九六六年に発表された〝文化体系としての宗教〟⑧という論文です。彼は、まず以下に訳出するように宗教を定義し、その定義の説明の為にこの論文を書きました。「宗教とはシンボル（象徴）の体系であり、この体系は、人に、力強く、広範な、長つづきするムードと、行動の為の動機づけを与えます。なぜかというと、この体系は、全存在の総合的秩序を作り出し、この秩序の概念を全く事実そのものであるという気分になりきらせ、その人のムードや動機づけが、またとなく真実であると思わせるからです。」⑨

さてこの定義の中で一番大切な概念はシンボルなのですが、シンボルとは、人間同志で何か伝達したいものがある時、その伝達の媒介となるものと言うことができます。動物でも人間でも危険の存在等を伝達する能力を持ってはいますが、人間は、考えていること、思っていることを伝達する能力又、その伝達されたことを理解する能力に優れております。その理由は、人間が、一つの伝えたい事柄を抽象化し、その抽象化した事柄を言語を含め、シンボルという形で伝達し、その受け取ったシンボルを解釈して具象化するという能力にすぐれているからです。ガーツは、このシンボルを使えるという能力こそ人間を動物から区別するものであり、又、このシンボルを使う能力は心の発展と共に増すと説明するのです。更に、人間の全存在・全行動は、人にとって何らかの意味を持っておらねばならず、この意味があるということは、意味を他の人にわかってもらう媒介によってのみ知ることができ、この媒介はシンボルなのですから、人はシンボルの中で息をし、動き、生きていることになり、ガーツの宗教の定義が意味を持つのであります。一例をあ

げるならば、クリスチャンでない人にとって、飾りものでしかない十字架や、単なるパンやぶどう酒が、クリスチャンにとっては、自分の罪の為に死んで下さった主イエス・キリストの処刑の場、又イエス・キリストの血であり、肉であり、それをおもいだすと今一度クリスチャンとして力強く生きてみたいと思わせられるわけです。このガーツの定義は、宗教の機能面を重視しておりますので、宗教の機能的定義といわれております。

ロバート・ベラーは、一九二七年生まれで、やはりハーバード大学卒業です。彼の博士論文は「徳川宗教」（邦訳、日本近代化と宗教倫理）⑩という書物になっております。彼は、ハーバード大学教授から、カリフォルニア大学バークレー校で、社会学教授及び比較社会学教授であると共に、同大学の日本国及び韓国研究所所長も兼任された方です。日本にも度々訪問され、この一月にも、国学院大学創立百周年記念国際シンポジウム「アジアの近代化と民俗文化の発見」に、前述のピーター・バーガートと共に主題講演者として招かれた方です。

さて、ベラーの「信仰のかなたに」も一九六二年から、一九七〇年までに書かれた十五の論文からなっておりますが、そのうち一番主要な「宗教の進化」⑪という論文を紹介します。

「宗教の進化」は一九六四年 *American Sociological Review* に発表されたもので、前述のガーツの「文化体系としての宗教」より二年前に発表されており、ガーツの論文にも大きな影響を及ぼしています。ベラーは、宗教と社会の分離が進む程、宗教のおよぼす影響が少なくなることを、宗教的な聖なるシンボルと社会構造との関係から説明しております。

ベラーは、宗教を五つに類型化し、それぞれを、原始宗教、古代宗教、歴史宗教、前近代宗教、そして近代宗教と呼び、それぞれの宗教の中でのシンボル体系、宗教行為、宗教組織、及び社会的影響についての考察を致します。原始宗教においては、神人、聖俗の区別はなく、宗教行為や宗教組織などという意識も全くなく、いわば無意識のうちに、すべての行動が、私達の言うところの宗教的意味あいを持っております。今でもオーストラリアの原住民に、これに近い宗教をもった人々がいます。古代宗教になると、神々の中にも序列ができますが、人と神との行き来はひんぱんであります。そのような中で、もっぱら神々のことを司る人々が政治的な力をもにぎり、支配するものと支配されるものとの区別が生じます。しかし、一人の人の世界と社会全体の世界は連続しており、一人の人の神をけがす行為、又一人の人の神を喜ばせる行為は、社会全体にのろいや、祝福をもたらします。この時代においても、来世と現世、又死者の世界と生者の世界の区別もはっきりしていません。この宗教は、現在でもアフリカやポリネシアに見出され、又ギリシャ神話の世界、古代ユダヤ教の時代、古代中国、古代インドにも見出せます。

歴史宗教となりますと、この世とあの世の区別がはっきりし、宗教的救いとは、この世からあの世への救いという意識が

強くなります。言葉を変えれば、この世は宗教的には、仮りの世になってきます。又、自分が救われるために、自分でも何かをする必要がでてきます。同時に、この世とあの世の区別に伴い、支配階級、被支配階級もそれぞれ二つに分かれ四クラスの社会が構成され、宗教的権威と政治的権威との競合関係がおこります。このような宗教は、紀元前一〇〇〇年に、インド、中国、中近東で一勢におこりはじめました。

前近代宗教になると、あの世にのみ救いを求めることが否定され、又支配階級の特権独占も否定されるようになり、この世の中で、万民が神と直接に対話をし、救いを現世の中で求めようとする気運がでてきます。たとえば宗教改革時のルターの万人祭司説などその典型なのですが、僧侶の助けなしに世俗社会の中で、世俗の職業をもって神につかえる方法を模索します。社会的には、大衆にも開かれた、教職者養成機関が数多く設立されるようになります。ベラーは、プロテスタント宗教改革時の宗教を、前近代宗教の例としてあげております。近代宗教となりますと、万人司祭が徹底されると共に、歴史宗教、前近代宗教を通じて、確固としてゆるぐことのなかったあの世を支配している神も、人間の心の投影にすぎないのでないかと思う気運が強くなってまいります。そうなると自分の良心に忠実であるということが唯一の宗教的意識となってしまい、しだいに、宗教的意識というより、自分自身の意識ということになってしまいます。そうなるとこの社会においては、宗教に興味を持っている人の集まりは、映画や、野球、又、社交に興味を持っている人の集まりと同じ役割しか果せないということになります。現在のヨーロッパ、アメリカなどにはびこっている宗教です。

さて、ベラーは、一般的には原始宗教の方から近代宗教の方向にむかって宗教が進化すると見ているのですが、このような変化を、個人の自由の増大と責任の増加という視点でとらえております。つまり、自由が増大すれば、社会は次の社会に進化するが、自由が減少すると、社会は一つ前の社会に退歩しうると考えております。又、個人の自由増大に伴い、専門職としての宗教家の果す役割は減少すると考えています。このようなベラーの宗教の位置づけは、進化論的定義といいます。

さて、最後にハンス・モルの「自意識と聖なるもの」(*Identity and the Sacred*)⑫を紹介します。ハンス・モルは一九二二年オランダで生まれ、オランダ、オーストラリアで教育を受けた後、アメリカのコロンビア大学で博士号を取り、現在、カナダのオンタリオ州ハミルトンにある、マクマスター大学の宗教学教授となっている方です。この方は、一九七八年十二月に東京で行なわれた宗教社会学国際会議(Conférence Internationale de Sociologie Religieuse)で発題講演をされた方です。この講演の内容は、Japanese Journal of Religious Studies, 第六巻、第一、二共通号に発表されておりますが、「自意識と聖なるもの」の良き要約となっております。

さて、モルの宗教の定義は簡単で〝宗教とは、自意識を聖化させるもの〟です。そしてこの簡単な定義を説明するために、二六〇頁もの書物をあらわしたわけです。さて、宗教がどのようにして自意識を聖化させていくのかという質問に対し、モルは、客観化(objectification)、献身(commitment)、儀式(ritual)及び神話(myth)を通してと答えます。宗教にはこの四つの要素があり、それぞれ、自分の宗教的生き方をはっきりさせるのに役立ちます。

さて客観化とは、自分の大切にしている秩序が、身近な所でおこる矛盾や例外、偶然な出来事などでこわされてしまうのを防ぐために、その秩序を、超越的な場にあって構成することです。一例をあげるならば、この世の父なる者は必ず年老いて死んでしまうのですが、天にまします我らの父は、決して死ぬことがなく、永遠に力強く愛なる方です。献身とは、いろいろと考えられる多くの秩序体系の中から、意識的に無意識的に自分にとって一番大切なものを選びだしそれに殉じた生き方をすることです。一例をあげるならば、戦争で徴兵される時、絶対に戦争反対ならば、自分や、家族、親類もろとも留置場に放り込まれても徴兵拒否することも一つの生き方としてはあるわけです。このような選択をせまられる時、私達は、自分なりに、一番ふさわしい秩序体系、ないし生き方を選びとり、それに献身し殉じて生きるのであります。儀式とは、自分の生き方を大切にするために、又、時としては、自分の生き方がわかりにくくなった時、もう一度はっきりさせるために、くりかえし行う行為です。一例をあげるならば、聖餐式や洗礼式などです。私達は、聖餐にあずかる度に、イエス・キリストが私達の為にして下さった救いの行為や又主が命じておられる戒めや希望などを思い起すことでしょう。又、新しく洗礼を受ける人を見る度に、自分の洗礼時を思い起こし、キリスト教に献身した事を新たに確認できることでしょう。儀式をとおして、私達は、自分の大切にしている秩序が見えなくならないようにしているのです。最後に神話ですが、これは、自分が大切にしている生き方、すなわち秩序を、何故、大切にしているのかを、それとなく、もしくは、はっきりと自覚させる話のことです。母が子供を寝かしつけながら、自分の覚えている童話を語ったりします。又、父が子供に自分の好きな英雄の話をすることもあります。両者共、自分の望んでいる生き方を子に伝えているのであり、自分ももう一度、その生き方を確認しているのであります。

さてこの四つの要素がうまくかみあっている時には、自意識ないし自分の生き方が、全く聖なるものであると自覚します。キリスト教用語を使うなら、そのような時に、自分は一番神様に喜ばれる人間となっており、神様の前に一番正しい生き方をしていると実感するわけです。このモルの宗教の定義は自意識的定義(identity model)といいます。自分自身の信じている宗教を、自分の自意識の中に取りこみ、それに献身し、それに殉

る生き方こそ宗教的生き方と信じるからです。

さて、ガーツの機能的定義、ベラーの進化論的定義、モルの自意識的定義を概観してきました。宗教が社会の中でどのような機能を持ちうるか、宗教が社会変革にどのような影響を及ぼすか、混乱した社会の中にあって、一人の宗教人が何故力強く宗教を信じられるのか、それぞれの異なった視点から宗教をながめております。私には、ガーツの定義は宗教の果す役割をとても良く説明すると思いますが、何故、私がキリスト教を信じつづけているのかという問いに良き解答を与えてくれるように思えません。ベラーの定義は、あまりにも自由尊重であり、私のように、自由と共に生存しつづける事も大切と信じている者には何か抵抗があります。その点、モルの定義は信仰の保守性が十分に考慮されており一つの宗教に殉じている人が何故、その信仰を信じつづけているのかを、献身という面から考察しており、なじみやすい定義と思います。

注

① Peter L. Berger, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, (Garden City, New York: Doubleday and Company, 1967)、邦訳あり。

② Gordon D. Kaufman, *God the Problem*, (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1972).

③ Berger, Ibid. Appendix II, "Sociological and Theological Perspectives", p. 179.

④ Kaufman, Ibid, Chapter 2, "Christian Theology and the Scientific Study of Religion", p. 17.

⑤ Clifford Geertz, *The Interpretation of Cultures*, (New York: Basic Books, 1973).

⑥ Robert N. Bellah, *Beyond Belief: Essays on Religion in a Post-Traditional World*, (New York: Harper & Row, 1970)、一部の論文の邦訳あり。

⑦ Hans Mol, *Identity and the Sacred: A Sketch for a New Social-Scientific Theory of Religion*, (New York: The Free Press, 1976).

⑧ Geertz, Ibid. Chapter 4, "Religion As a Cultural System", p. 87.

⑨ Ibid. p. 90.

⑩ Robert Bellah, *Tokugawa Religion: The Values of Pre-Industrial Japan*, (Boston, Beacon Press, 1957)、邦訳あり。

⑪ Bellah, *Beyond Belief*, Chapter 2, "Religious Evolution", p. 20.

⑫ Mol, Ibid.

（共立研究所講師）

全国理事会報告

書記
高橋久之

・一九八二年十一月八日　名古屋中小企業センターにて

主要議事

(1) 中部部会設立に伴う全国理事会改組の件
中部部会より副理事長一名と理事一名を選出していただく

(2) 「出版基金」募集について
文案を検討承認する

(3) 第二回全国研究会議の決定事項承認の件

(4) 編集会議について
中部部会より一名加わる。その他

(5) 入会申込書作成について

・一九八三年五月二十三日　お茶ノ水学生基督教会館にて

主要議事

(1) 理事会の役務分担の方針と人事
理事長　丸山忠孝（東部）
副理事長　安田吉三郎（西部）
黒川雄三（中部）
書記　佐布正義（東部）、高橋久之（西部）
会計　小嶋彬夫（東部）、工藤弘雄（西部）
会誌　山口昇（東部）、鍋谷堯爾（西部）、牧田吉和（中部）

(2) 会則改正の件
改正点を了承し、印刷配布する

(3) 一九八二年度決算報告の承認と一九八三年度予算案の審議ならびに承認

(4) (5) 出版基金の報告と今後について
第二回研究会議について

(6) ATAについて

東部部会活動報告

（一九八二年七月から一九八三年七月まで）

東部部会書記　大滝信也

一九八二年度

七月十二日（月）午後六時二十五分から九時まで日本長老久我山教会で理事会が持たれた。出席者十一名、欠席者十名。秋の定例のシンポジウム・講演会のプログラムを作成した。会員審査が行われ、一名の準会員が正会員として認められ、西部正会員一名が転入を認められ、一名の入会希望者が正会員として認められた。

十月一日（金）午後六時十五分から九時までお茶の水学生キリスト教会館二一二号室で理事会が開かれた。出席者十名、欠席者十一名。秋のシンポジウム・講演会の最終的準備をした。会員審査が行われ、一名の退会、一名の正会員としての入会、二名の準会員としての入会、一名の西部部会よりの転入を認めた。

十一月二十九日（月）午後一時三十分から八時三十分まで、アッセンブリー中央福音教会を会場に第十四回シンポジウム・講演会が開かれた。午後一時三十分から二時までの礼拝では稲尾三活氏が説教、午後二時から五時までのシンポジウムでは、「聖書の正典論」のテーマで、西満氏が「旧約聖書の正典論」と題して、中沢啓介氏が「保守派が直面している旧約正典の問題」と題して、内田和彦氏が「新約聖書の正典論」と題して発題した。司会は榊原康夫氏だった。午後七時から八時三十分までの講演会では、柿谷正期氏が「カウンセリングの現場でのユーリカ経験――低血糖症の実態」という題で講演。なお、午後五時三十分から六時三十分まで理事会が持たれた。出席者十六名、欠席者五名。

一九八三年度

二月二十八日（月）午後六時二十分から八時五十分までお茶の水学生キリスト教会館二一二号室で理事会が持たれた。出席者十名、欠席者十一名。春の総会・研究会・講演会のプログラムを作成した。会員審査が行われ、三名が正会員として入会を認められた。

四月二十五日（月）午後一時三十分から午後八時三十分まで、お茶の水学生キリスト教会館ホールで、第十四回総会・研究会・講演会が開かれた。午後一時三十分から二時までの礼拝では中村寿夫氏が説教、午後二時から三時までの総会では議長が丸山忠孝氏、書記が大滝信也氏で審議が進められた。午後三時から五時までの研究会では、「最近の聖書論関係著作を巡って」のテーマで、金本悟氏が Geisler, N. L., ed. *Inerrancy* の紹介と批評を、大滝信也氏が Packer, J. I. *Beyond the Battle for the Bible* の紹介と批評を、矢内昭二氏が Rogers, J., and Mckim, D. K. *The Authority and Interpretation of the Bible* の紹介と批評をした。司会は中沢啓介氏。午後七時から八時三十分までの講演会では、丸山忠孝氏が「福音主義は歴史をどう見るか――今日の聖書論問題との関連において」と題して講演。司会は西満氏。

部会活動

一九八三年七月四日（月）午後六時三十分から八時三十分まで、単立朝顔教会で旧・新約学合同部会が持たれ、トリニティー神学校のW・カイザー博士が「聖書解釈学と創世記一―十一章」と題して講演をした。

（以上）

西部部会活動報告

（一九八二年八月より一九八三年七月まで）

西部部会書記　高橋久之

一　第八回西部部会総会

一九八三年五月九日　神戸基督改革宗長老教会にて

・議事

(1)　前年度の活動報告ならびに決算報告の承認

九州地区、中部部会開拓に伴う支出のため欠損会計となった。

(2)　新年度の活動方針の説明承認

現在の理事選挙のあり方を定数ワクを含めて検討する

予算案についての説明承認

(3)　理事の改選について

郵便投票により、次の六氏がえらばれる。

有賀喜一、鍋谷堯爾、服部嘉明、唄野隆、中島守、橋本竜三

・研究発表

「情報化時代と宣教」（森作常生氏）

「翻訳された聖書は権威があるのか」（安田吉三郎氏）

「靖国問題をどうとらえるか」（西川重則氏）

・講演

「靖国問題――その今日的課題」（西川重則氏）

二　理事会活動

・一九八二年十月四日　大阪基督教短大にて

主要議事

(1) 一九八三年度秋の研究会議について

(2) 中部部会設立に伴う全国理事会のあり方について（理事、部費、区分割り）

(3) ＡＴＡとの係り方について

(4) 新会員の受け入れ

柏木哲夫、柏木道子、宮脇利夫（以上正会員）、岩間洋（準会員）

(5) 基金について

・一九八二年十二月二十九日　鍋谷理事長宅にて

主要議事

(1) 全国理事会より諮問のあった規約案の検討

(2) 第二回全国研究会議について

(3) 一九八三年度総会の準備

(4) 新規会員の受け入れ

本田右一氏（正会員）

(5) 編集について

・一九八三年三月十一日　高橋理事宅にて

主要議事

(1) 全国研究会議の開会礼拝担当者について

(2) 春の研究会議について

(3) ＡＴＡの依頼について

(4) 一九八三年度予算案の検討

(5) 五月の総会のプログラムについて

・一九八三年五月九日　ルーテル神学校にて

主要議事

(1) 新任理事会人事について

理事長　安田吉三郎氏（新任）、書記　高橋久之氏（再任）、会計　工藤弘雄氏（再任）、編集　鍋谷堯爾氏（新任）

(2) 小島伊助氏（名誉会員）の処遇について

・一九八三年六月三十日　神港教会にて

主要議事

(1) 新会員受け入れ

菊地正人氏（正会員）

(2) ＡＴＡとの関係について

(3) 会員名簿作成の件

(4) 学会誌の編集について

(5) ニュースの発行について

(6) 部門別活動の今後のあり方について

三　研究発表

・一九八二年十月四日　大阪キリスト教短大にて（実践神学部門の集い）

「韓国におけるＡＴＡ総会――第三世界神学者会議――報告」　鍋谷堯爾氏

「韓国におけるＡＭＡ総会報告」　武田二郎氏

「『仏教文化への福音主義神学批判』批評」久保田周氏

「世界宣教の現状――World Christianity Encyclopedia を中心に」　中島守氏

・一九八二年十一月二十二日　武庫之荘福音自由教会にて（秋期研究会議）

「聖書の権威をめぐって」

発題講演者　橋本竜三氏

黒川雄三氏

内田和彦氏

編集後記

「福音主義神学」の第十四号を皆様のお手もとにお届けできることを感謝いたしております。

今回は論文四本と書評を掲載することができました。しかし、少し言いわけがましくなりますが、このような形に落ち着くまでにはいろいろなう余曲折がありました。今のところ東部および西部の各部会から論文二本ずつを掲載することになっておりますが、今年も東部の予定の二本の中、一本を執筆してくださるはずの先生から、締切期日の直前になって、執筆が不可能であるとの申し出があり、急遽東部の編集委員が集まり協議の結果、止むを得ない事情により、本間論文を採用し掲載することにしました。本間氏はすでに論文を一篇掲載されており、なるべく多くの方々に発表する機会を提供したいという考えから、今回はご遠慮いただく予定にしておりました。しかし、他に提出された論文は、東部の編集委員が協議の結果、エッセー・タイプで論文の形式をふんでいないものや、取り上げられた問題が、本神学会で取り扱うべき領域から少し離れ過ぎているのではないかと判断される論文であったため、結局一度は断念していた本間論文が浮かび上って来たというようなわけです。

この論文を掲載するためのもう一つ問題となった点は、論文の内容上、ヘブル語を音写したのでは意味がないため、ヘブル語の活字を用い、しかも横組みにしなければならないために、相当大巾な印刷費の増額が見込まれるという点でした。当神学会の会誌出版の予算はすでに計上されており、大巾な変更は認められず、そのためにヘブル語活字と横組みにするための増額分は本間先生に個人的に負担していただくという点で了解していただきました。このようなわけで、編集委員も最後まで振廻され、その上今夏の異例な暑さも加わり、大汗をかいた次第です。いろいろなご意見やご批判もおありのことと思いますが、以上のような事情があり、今回は例外的なことをご理解くださり、何卒ご容赦くださいますようお願いいたします。

今回から中部々会より牧田吉和先生が編集委員として加わってくださり大いに強められました。また中部々会から書評一篇が寄せられ感謝でした。中部々会の会員数がふえ、活動も盛んになって、論文なども寄稿される日が一日も早く参りますよう、心からお祈りいたしております。

なお、執筆あるいは投稿してくださる方々に重ねてお願いがございます。どうか執筆なさる前に、本会誌十三号の巻末に掲載いたしました「『福音主義神学』執筆についてのお願い」の項をお読みくださり、執筆のための要項にしたがって執筆してくださいますようお願いいたします。特に最近は原稿を横書きにする方がふえてまいりました。これは編集の段階で全部たて書きに書きなおさなければなりませんので二重の手間になります。

ぜひとも、たて書きにしてくださいますよう、お願いいたします。また、原稿は浄書して、読みやすい字で書いていただきたいのです。読みにくい字のために誤植になることがしばしばあり、編集の方で大変苦労をいたします。また論文を執筆なさる方々は、必ず英文のレジメをタイプで浄書して（ハンド・ライティングは誤植のもとになり、また判読に時間がかかる場合が多いので）添付してください。

以上お願いばかりで申しわけありませんが、編集の仕事がスムーズに進むためにも、ぜひご協力くださいますなら幸いでございます。

最後に私事になりますが、老骨にむち打って編集委員を二期連続してつとめさせていただきましたが、不十分なことのみ多く、心苦しく思っております。幸い他の編集委員の先生方のご尽力により励まされて今日までそのつとめを果たすことができて感謝いたしております。最近は心身気鋭の先生方がふえてまいりましたので、来年の会誌にはそれらの先生方の活躍により、より充実した内容の会誌が編集されますよう心から願っております。

終りに本会誌の印刷・出版の陰の力として奉仕してくださったいのちのことば社出版部の方々に心から感謝いたします。主がその労苦に報いてくださいますように。

一九八三年九月

（山口　昇）

一九八三年十月三十一日発行　定価　一八〇〇円

編集者　西牧満
田宮吉
村安武
田山吉
口三郎
昇

発行者　国立市谷保八四五三
東京基督教学園
東京基督神学校内
日本福音主義神学会

印刷　いのちのことば社印刷部

発売　いのちのことば社